

隅田川の記憶を読む

移り変わる風情に時の思いを重ねる

帝京大学経済学部
観光経営学科教授

大下 茂

いつの時代も蕩蕩と流れる隅田川。決して大河ではないが、東京人にとっての存在はこの上なく大きいものです。本稿は、平成28年7月2日に開講した「すみだ地域学セミナー特別講座」での内容を取りまとめたものです。

これまでの講座では、歴史学を専門とする講師陣からの数々の示唆をいただけてきました。今回は筆者の専門とする「観光まちづくり」の観点から、隅田川と地域の履歴を辿り、それらを踏まえて、現代そして未来につながる「時の思い」を感じ、これからの観光による地域づくり・まちづくりを考える視座を得たいと考えた座学の内容としました。

隅田川と観光

2015年の一年間に日本を訪れた観光客は約2000万人。浅草と東京スカイツリー®を結ぶ吾妻橋でも多くの訪日外国人観光客が、隅田川を背景に写真を撮っている姿がみられます。ロンドンやパリを例示するまでもなく、都市観光において河川は特別の存在です。しかしこれは、現代に限ったものではなく、我が国においては江戸時代に既に、現在で言う都市観光の行動が見られていました。その観光対象が「隅田川」であり、隅田川では、季節を感じる様々な観光行動が展開されていたのです。

「観光」とは中国の易経による「国の光を觀せる」が語源であると言われていいます。地域には、そこに住まう人々が誇りや愛着をもって大切にしている「光」があります。それをお観せすることが「観光」の語源となっているのです。「光」

は形のあるものばかりではありません。地域の中で脈々と語り継がれてきた物語や暮らしぶり等の「地域の記憶」も立派な観光対象となるのです。

隅田川と江戸市中の成立

隅田川は俗称であり、正式には荒川水系の一部です。江戸時代までは、浅草川あるいは大川とも呼ばれていました。1590年に江戸に入府した徳川家康は、頻りに洪水をおこす利根川の流れから江戸を守ることと、新田開発、舟運確保を目的として、利根川の流れを東に移す「利根川東遷」に着手し、現在の水系の原型をつくりあげたのです（図-1参照）。

当時の主要な物流は舟運によるもので、千葉の館山沖に海溝があることから波が高く、舟運での難所と言われていました。東北地方からの物



図-1 利根川東遷

出典：利根川舟運・地域づくり協議会（平成22年1月）
『利根川下流クルージングガイド』
国土交通省関東地方整備局利根川下流河川事務所監修



図-4 分間江戸大絵図 (元禄13年・1700年頃)の隅田川下流部



図-3 江都両国橋夕涼花火之図



図-2 日本橋雪晴 (名所江戸百景)

資を運ぶには、時間がかかって「西廻り」、すなわち、日本海側から瀬戸内海を通過して大坂経由で江戸に運ぶ舟運ルートがひとつ。もうひとつは、風と波の影響を受けるが近い「東廻り」でした。また、「東廻り」で房総沖の難所を避けるために、銚子沖から利根川に入るルートも生み出されました。

受け地 (観光地) である江戸においては、都市内河川と運河・河岸が整備されます。特に荷上場は、米 (蔵前)・魚 (日本橋)・野菜 (神田)・材木 (木場)・酒 (新川) のように専門化されていきます。当然ながら、江戸の河岸も賑わいの拠点となっていました。日本橋周辺には、魚河岸をはじめとして多くの河岸があること、東海道の始点でもあったことから、マーケット (市場) として拡大していくのです。『江戸名所図会』や『名所江戸百景』にも描かれていて、多くの船の往来があり、賑わっていた様相が見て取れます (図-2)。

河岸と同様に橋詰も賑わいの拠点となっていく。図-3は両国橋の賑わいを描いた作品のひとつです。そもそも江戸時代には「両国」という町名はありませんでした。隅

田川に架かった両国橋を含めた両岸、すなわち西詰と東詰一帯を指す広域通称地名でした。

両国橋の架橋には、1659 (万治2) 年説と1661 (寛文元) 年説のふたつがあります。その切っ掛けとなったのは、1657 (明暦3) 年正月の江戸の大火、有名な「明暦の大火 (振袖火事とも言う)」であり、焼死者は10万人にも及んだと言われています。図-4にあるように、明暦の大火後に幕府は、江戸市街地の拡大として、隅田川左岸地区の本所地区に着目するとともに、隅田川に両国橋を架橋、橋詰に火除け地として、広小路を設けました。現在の両国橋よりもやや下流の場所です。橋をわたると正面が、明暦の大火の犠牲者をとむらった回向院であったのです。1700年頃の江戸大絵図によると、新大橋や永代橋も架橋され、隅田川の両岸に市街地が拡大していることが見て取れます。

江戸・中後期における江戸の「名所化」

江戸の中後期になると「観光」がブームとなります。現在、我が国の人口が停滞・減少に向かっていくことは周知の通りです。我が国の人口推移をたどると、一様に増加してきたのではなく、これまで、人口増加期と人口停滞期を繰り返してきました。直前の人口停滞期は江戸中期。1700年頃の人口は3000万人と言われており、江戸末期の3400万人と比べると150年間に約1割しか人口が増加していない、安定期にあったのです。

この時代、農業の生産性の向上等も伴い、農村社会に貨幣・通貨が定着するようになるとともに、名所絵図や膝栗毛等、現在で言う「旅の情報誌」や「タウンウォーカー」のような情報誌 (『江戸買物独案内』) が流通するようになります。街道と宿場町も整い、「旅」いわゆる「観光」がブームとなる条件が整うのです。

また、観光ブームの火付け役となったのが、八代将軍・吉宗公の政策でした。吉宗公は、質素倹約を進めた名君ですが、一方では江戸庶民の楽しみを提供しました。江戸城から2里・8kmのところに、観光拠点を一つついているのです。東は隅田川 (桜)、西は中野 (桃)、南は御殿山 (桜)、北は飛鳥山 (桜) であり、現在でも花見の名所となっているところです。また、それぞれ



図-5 隅田川左岸・両国橋下流橋詰に解説サインが設置されている

の名所では、地元の人々が、来訪者相手に商売をする権利を与えたといわれています。現在で言う「特区政策」と見てもよいと思います。現在は公園となっており、地元の方々が商売をすることを禁じていることから比較すると、先進的な整備事業であったことが理解できると思います。

また、歴史研究や地誌研究に使用される『江戸名所図会』は、江戸名所の集大成と言われているものです。隅田川沿川の名所をもとにした鈴木章生先生の研究によると、『江戸名所図会』に「隅田川」が描かれた図は40画に上り、そのうち「隅田川」と題された図は21画あると分析されています。『江戸名所図会』は、地誌としての役割をもっていることから、隅田川およびその流域にまつわる故事・伝承や歴史と挿絵が描かれています。これによると、千住大橋より下流から大川橋（現在の吾妻橋付近）に集中していることがわかります。すなわち、吾妻橋から上流には多くの物語が潜在しており、今後の観光としてのポテンシャルの高い地域とも見てとれます。

逆に、吾妻橋から両国橋にかけては、多くの浮世絵を、葛飾北斎は残しています。葛飾北斎は1760（宝暦10）年9月23日、本所割下水付近（現在の墨田区亀沢付近）で生まれ、90年の生涯のほとんどを墨田区内で過ごしながら、優れた作品を数多く残しています。墨田区民活動推進部が編集・発行した『北斎ゆかりの地マップ（2013年3月）』によると10画が残されているとのこと。

北斎は、『富嶽三十六景』等の代表的な作品を示し、その人気は国際的です。平成28年11月22日の『すみだ北斎美術館』のオープンにより、世界からの新たな集客に期待がかかります。既に、両国橋の左岸下流橋詰には、浮世絵を掲示した解説案内を設置しており（図-5）、葛飾北斎が描いた風景を辿る新しい観光プログラムの創出が待たれます。

沿川の風景の違いはありますが、川沿いに身を置くと、隅田川のような比

較的身近で小規模な河川であっても、茫洋ぼうようとしており掴みどころがないことに気づきます。これは河川景観の特徴のひとつです。このような中でも、沿川の故事来歴を手掛かりにポイントを絞って描かれた風景や浮世絵の題材は、茫洋とした風景の中で花火、釣り、花見と夕涼みといった観光行動の拠点となっていたことが理解でき、また風景を引き締める拠点となっていたことを感じることが出来ます。

その中でも特に両国橋は、1742（寛保2）年5月の調査によると一日に2万人以上の利用があったと記録されています。往来が多くなると、通行人をターゲットとした商業が生まれてきます。『江戸買物独案内』によると、両国橋の西詰では68店舗、東詰では13店舗の合計81店舗の記載があります。また、現在の両国駅の近くでは寿司・料理屋等の外食産業の記載も見られます。それには回向院との関係もありました。回向院での出開帳は166回あり、多くは江戸中期以降に増加しています。また、江戸大相撲の興行は59回開催され、全体の4割、しかも同様に江戸後期に集中しています。すなわち、両国地区は、江戸中後期において集客の拠点となっていた様相が伺えます。これも隅田川を渡るという非日常の体験によって生まれたものと解釈できます。

後藤新平の描く新東京の名所化

東京が近代都市へと変貌しつつある中、大正12年9月1日に関東大震災がおきます。その一週間前の8月24日に加藤友三郎首相が死去し、8月28日に山本権兵衛に組閣の命が下りましたが、組閣は難航していました。震災の翌2日の早朝、これまで入閣を拒んでいた後藤新平が山本のもとを訪れ、入閣を受け入れ、同日の夜、いまだ余震がある中で「山本内閣」が発足、後藤は内務大臣に就任します。その夜から『帝都復興根本策』の基本骨格を取りまとめます。

帝都復興院は、9月27日に認められ、同29日に任命、後藤新平が総裁を務めることとなります。その後、調整が進められ、①独立した機関を設け、計画諮問のために帝都復興調査会を設ける（『帝都復興院』）、②経費は原則として国費とし、その財源は長期の内外債による、③罹災地域の土地は公債を発

行して買収し、土地の整理を実行した上、適当・公平に売却する（『土地区画整理事業』の事業制度の創出）の3つの基本方針に基づいて、帝都復興が進められるのです。

隅田川との関わりとして、隅田公園と復興橋梁群に着目したいと思っています。大規模な地震がおこる度に「復旧」と「復興」の議論がなされていますが、「復興」はなかなか前進しないのが現状ではないでしょうか。関東大震災は、首都をおそった大震災であったため、復旧にとどまらず、これを機に道路の再構築や火災に強い不燃建築物等に取り掛かります。さらに隅田川に架かる橋梁整備においては、バリのセーヌ川に架かる橋を模して、橋梁群全体で芸術性を高めるように、後藤新平は指示します。この指示に、高い志を感じざるを得ません。対象となる橋梁は、国が整備を進める橋梁が、相生橋・永代橋・清洲橋・蔵前橋・駒形橋・言問橋の6橋、東京市の整備する両国橋・既橋・吾妻橋の3橋の合計9橋です。それぞれの橋梁が異なるデザインとすることで、隅田川全体が美術館の作品としても見られるようにしたのです。清洲橋（図-6）は吊り橋型、永代橋はアーチ型と、対をなすシルエットとなっています。



図-6 吊り橋型の清洲橋。ドイツケルン市に架けられたライン河の吊り橋がモデルとなっています

また、帝都復興によって、隅田公園・錦糸公園・浜町公園の3つの大規模な公園が整備されることとなります。このうちの隅田公園は、日本初のリバーサイドパークであり、公園整備において画期的な思想で整備されたのです。吾妻橋から白鬚橋にかけての両岸での整備が計画され、「道路公園」「避難所」「臨川公園」という新しい考え方が導入されました。また、吉宗公によって整備された墨堤の桜並木を拡張する等、行楽の地の既存イメージも活用したものでした。

訪日外国人観光客の多くが、現在撮影している光景は、後藤新平が描いたイメージが実現したものであり、時を超えて、被写体となる風景へと育まれてきたのです。

これからの隅田川観光を考える

ここまで隅田川と江戸市中の成立、江戸中後期の隅田川沿川の名所化、帝都復興での取組みという3つの切り口から隅田川を時空的にみてきました。これらを踏まえて、最後に、現代そして未来に向けての問題提起をしておきたいと思っています。

① 地域の記憶が求められる時代

「個性化とは「地域の記憶」を大切にすること

近年の観光ブームでは、「これぞ」といった著名な観光資源を有していなかった地域にも光があたり、集客の対象となってきました。これら人の気を惹く地域に共通している特徴は、「地域の履歴・記憶」を大切にし、風土や暮らし、地域の小さな小さいながらも輝いている物語を丹念に拾い上げて、ストーリー性をもって組み立ててアピールしていることです。

全国津々浦々の地域が、高度経済成長期の中での効率主義のもとに、同じような様相を呈してきたいわば「JIS的な地域づくり・まちづくり」を進めて無個性化が進んだ中で、地域の違いを生み出すためには、「地域の記憶」、それこそが地域の個性を表現するものとしてクロージアップされてくるものだと思います。

それは、地域において継承されてきた「暮らしぶり」「物語」や「愉しみの型」を再認識することです。隅田川沿川には、江戸から現代にいたる様々なコンテンツが眠っており、次の出番をまっています。『温

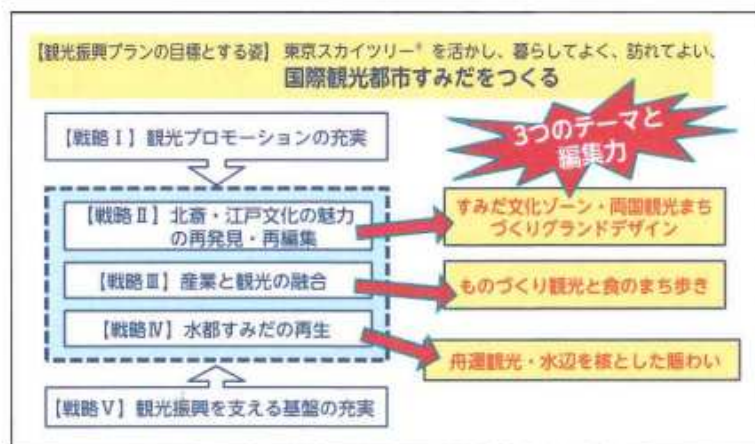


図-7 墨田区観光振興プラン（改訂版）の骨格

故知新」にもとづくこれからの取組みこそが、墨田の新しい地域創発コンテンツとなるのです。そしてそのキーワードが、『江戸文化』『ものづくり』『舟運』の3つです。

②墨田区観光振興プランの改訂と観光まちづくりの展開

一昨年度（平成26年度）、墨田区観光振興プランの3度目の改訂を行い、その検討の責任者を務める機会を得ました。観光まちづくりの目標は、前計画から継承した「国際観光都市すみだをつくる」のままでしたが、計画の構成は大きく変更を加えました（図17参照）。先に示した『江戸文化』『ものづくり』『舟運』の3つのテーマを、あんな。の部分におき、上下に、「観光プロモーションの充実」と「観光振興を支える基盤の充実」をおくこととしました。墨田の魅力をもつ3つのテーマでくくり、地域の魅力を編集することに注力しました。本稿のテーマである隅田川は、戦略Ⅱの北斎・江戸文化、戦略Ⅳの水都すみだの再生との関連が大きいものとなっています。

③地域のシンボルへの理解の先にある、これからのすみだ

～舟運・河岸の活用による水辺の賑わいづくり

江戸時代に高速交通網であった「舟運」は、「賑わい」とともに「富・利益」を地域にもたらしました。その後、陸上交通へと移行し、舟運は影を潜めていましたが、近年、古くて新しい移動交通機関・観光体験として、舟運が再びクローズアップされてきています。特に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、新しい交通機関として、玄関口である羽田空港からのアクセスとしての活用も期待されています。

かつて多くの旅人が、新川から小名木川を通じて成田詣を楽しんだ史実がありました。その時の河岸（船着場）は、日常的に楽しめる機会が少なかつた当時、今の交通結節点の駅前以上の賑わいがあったものと想像できます。まさに水辺とまちとの接点である「河岸」の賑わいづくりも併せて進めることが必要となっているのです。それを『舟運道中』というキャッチフレーズに思いを乗せて、すみだから発信することが効果的と考えています。

また、船着場に船が停泊しているだけで絵になるのです。現在の法律では、

不法係留とみなされますが、船の往来自体がプロモーション効果となるのです。また、係留船は、点景・風情演出としての役割ももっています。おそらく北斎も、そのようなことを願っているものと思います。これが浮世絵のモチーフになると。

隅田川から都市内河川を船が行き交う光景をイメージしていただければ、より理解は深まります。その際には、江戸時代の人々の思いに気持ちを重ねて、今一度、現在の隅田川や都市内河川の水辺を見直すきっかけとさせていただきたいものです。

おわりに

座学講座では、地域のシンボル「隅田川」のこれからを考えるにあたって、「時間軸」を辿って、隅田川に近づいてきました。講座の背景として、歴史から学ぶものは「時の人々の思い」であり、そこに生まれる「物語」ではないかと考えたことによるものです。それこそが、墨田ならではの新しい観光のコンテンツに必ずなるものと確信しています。

座学講座の翌週の7月9日は、「時空で考えた知識」を携えて、実際に船上より「隅田川」に臨みました。あいにくの雨模様でしたが、江戸文化が花開く時期や帝都復興の時期の、隅田川に対する「時の人々の思い」を重ねながら、隅田川遊覧を五感で学んでいただく機会となりました。